一般意味論セミナー

——1日おきのジャムをたべるには——

片桐ユズル

著者紹介

1931 年 Tôkyô 生まれ

早大大学院 M. A., San Francisco State College 留学。つねに詩と英語教授法が関心事であり，それを意味論的立場から統一的に見てきた。

都立杉並高校，松蔭女子学院大学などでおしえたのち，1973年 4 月から京都精華大学教授

著書：「意味論入門」「片桐ユズル詩集」（思潮社），「意味論と外国語教育」（くろしお出版），「英語・まちがいのすすめ」（季節社），「ほんやら洞の詩人たち」（晶文社），「高められたはなしことば」（矢立出版），オールダス・ハクスレー「島」（人文書院）ほか。

国際一般意味論協会，ＧＤＭ英語教授法研究会員。

検印省略・版権保留

一般意味論セミナー

—1日おきのジャムをたべるには— 定価 2,500円

1983年11月21日　第1刷発行

Kakite　：　片桐（カタギリ）ユズル

Hanmoto：　くろしお出版

〒101　東京都　千代田区　神田小川町 3-24

でんわ　(03) 291-3557　ふりかえ　東京 9-31301

ページおちの本，ページみだれの本はとりかえます。

KATAGIRI YUZURU

一般意味論セミナー

——1日おきのジャムをたべるには——

くろしお出版
Tôkyô, 1983

もくじ

一般意味論とはなにか？——まえがきにかえて …… 5

第Ⅰ部　体験する

1　北米での一般意味論セミナー ……11
2　一般意味論トロント国際会議に参加して ……21

第Ⅱ部　おしえる

3　ことばだけを取り出すのはむずかしい ……33
4　《地図は現地でないこと》を教えて……35
5　一般意味論ジャム・セッションおぼえがき ……56
6　教科書は世界のすべてをかたりつくすわけではない ……73
7　過情報社会の視聴覚教育 ……77

第Ⅲ部　かんがえる

8　「らしさ」について……91
9　非言語的技法とコージブスキー理論…… 107

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

10　ことばにたよらないこと——日本文化の1側面 …… 117

第Ⅳ部　文化をこえて

11　考える人をささえる目に見えない部分 …… 129
12　世界文学とサピア=ホワーフの仮説 …… 137
13　文化をこえて(上)…… 140
14　文化をこえて(下)…… 160
15　スナイダーの仏教のばらしかた …… 171
16　意味論三題ばなし——コージブスキー，
　　クリシュナムルティ，カスタネダ…… 180

第Ⅴ部　時間をこえて

17　シンボルのいろいろ …… 201
18　風景画をめぐって …… 218

あとがき…… 249
初出一覧…… 251
図版一覧…… 252

一般意味論とはなにか？

——まえがきにかえて——

一般意味論は，ことばはもちろんのこと，そのほか記号一般←と→行動，の相互関係をしらべます。

異文化が入りみだれ，新旧の感じ方がはげしく変わりつつある現代において特に，一般意味論は必要である，とわたしたちはおもいます。

なぜなら一般意味論では，もろもろの行動を意味的反応の側面においてとらえ，どのような記号的行動がわたしたちを生きのこる方向へみちびくかを基準に，批判と修正をくわえ，進化の袋小路におちいらないような意味的反応が体得できるように努めています。

いいかえれば一般意味論は，記号作用に対する自覚を全般的に高めることで，自己実現をめざす，ともいえます。

一般意味論の中心的かんがえ方は，記号作用を抽象の過程として見ます。この立場は，もろもろの異なった分野や方法を整理統合するわくぐみになるばかりでなく，この混乱の時代において分裂しがちなわたしたち個人の統合にも役立っています。

たとえば一般意味論の守備範囲を抽象のレベルの高低にしたがって次のように分けてみることができます。1.「できごと」が神経末端をシゲキするところからはじまって→言語に発せられるまでの，主として「言語以前的プロセス」。

2.は1をふくみながら，言語化のいろいろなレベルにおける反省と工夫。3.は1と2をふくみながら，文化的社会的なひろがりにおける記号状況全体についての理解とクリティーク，すなわちメディア・エコロジー。

「記号」と，それが指し示す「現実」との関係についての自覚をたすけるために，それをコージブスキーは「地図」と「現地」の関係にたとえ，次の3つの格言にまとめた。

1. 地図は現地ではない。
2. 地図は現地のすべてをあらわすわけではない。
3. 地図についての地図をつくることができる。

抽象過程について意識的になるばかりでなく，無意識的にも生存的意味反応ができるようになるために，一般意味論では，ことばづかいでの工夫とか，いろいろな訓練方法を開発してきたが，他の方法，とくにヒューマニスティック・サイコロジーなどから，多くをとりいれている。

一般意味論の提唱者アルフレッド・コージブスキー（Alfred Korzybski, 1879—1950）は第一次大戦の悲惨を経験しながら人類がそれでも第二次大戦へと進む事態にひどく心を痛め，人間とは何かについて深く思いをいたしたところ，記号により時間をこえる能力（Time-binding）と，記号をつかいながら記号について意識できる（地図についての地図）能力こそ人間独自のものであることがわかった。この人間独自の能力を生かすことで，ヒトラーのような非生存的記号行動におちいらずに，人類は進化の方向をまちがえずにいけるはずだと彼はかんがえ，大著『科学と正気』（*Science and Sanity*, 1933）にまとめ，この道を一般意味論と名づけた。その後ほかにも似たような考えをするひとたちがいることがわかったので，彼の後継者たちのなかでは，記号⇄行動の相互関係を強調して一般意味論をサピア=ホワーフ=コージブスキー=マクルーハン=ボワ理論と呼ぶこともある。

わが国へ一般意味論の名前をひろめたのは大久保忠利訳で1951年にS．I．ハ

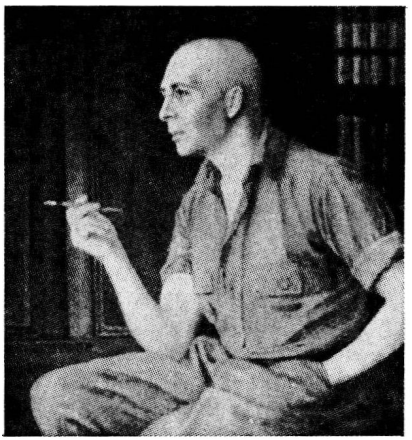
ヤカワ『思考と行動における言語』(*Language in Thought and Action*, 1949) が岩波書店より出たことであり，それに大久保氏自身の著作『コトバの心理と技術』(1952)，『コトバの魔術と思考』(1953) など，同氏の精力的な活動がつづいた。しかしコトバ以外の側面における一般意味論は知られないままであった。

以後，1956年にアービング・リー，1965年にラパポートの翻訳が出たり，ウェンデル・ジョンソンを応用した関計夫『適応と意味論——カウンセリングにおける言葉の機能』(金子書房，1965) や，アービング・リーのもとで学んだ斎藤美津子国際キリスト教大学教授の話し方や聞き方への応用がある。しかし一般意味論のきちんとした入門書は，日本語ではわたし自身の本をふくめて，心からひとにすすめたくなるものはない。そこでどうしてもわたしが書かなくてはならないのだが，非アリストテレス的綜合の体系としての一般意味論の可能性にくらべて，わたし自身の力の足りなさを痛感するばかりだ。しかし何もないよりは，何かあった方がよいし，いままで見落とされていた部分にいくらか光をあてることと，いくつかの応用例を示すことで，さらに多くのひとが，いろいろな領域で応用したくなるキッカケになればさいわいとおもい，あえて，かなり粗雑なままの材料をここで本にまとめた。

なお，コージブスキーの設立した一般意味論研究所によるセミナー・ワークショップを経験した足立正治，片桐ユズル，佐藤由美子は他の10人のメンバーとともに，1982年8月に一般意味論研究会を設立し，セミナーやワークショップ，講演会，研究会，月刊ニュースレター発行などの活動をつづけ，会員は1983年8月現在約100人をかぞえる。詳細は〒606 京都市左京区岩倉木野町137 京都精華大学　片桐ユズル研究室，電話 (075) 791—6131 (内線227) に問合せてください。

第I部　体　験　す　る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



〔図1〕 Alfred Korzybski (1879–1950)

1　北米での一般意味論セミナー

（一般意味論セミナー1974）ユズル

国際一般意味論協会の機関誌『エトセトラ』の広告で，毎夏約２週間の一般意味論のセミナーが，コージブスキーの住んでいたレークビル（コネチカット州）のちかくで行なわれていることを知ったのは２・３年まえだった。この広告では，全人格的深層におよぶ訓練を重視し，個人の積極的参加を最大限にし，いわゆる講議みたいなスタイルを最低限にへらしたい，と書いてあった。コージブスキーの『科学と正気』には，道にとぐろをまいたロープを見せて「ヘビだ！」といっても，すぐ逃げ出さないで，ヘビかロープかみきわめる一瞬間だけ反応をおくらせる，そういう習慣を神経組織に植えこむことが一般意味論の訓練だ，と書いてあった。

ちょうどそのころ私の意味論も1965年にかいた『意味論入門』のコトバ中心主義から，コトバはすべてをかたりつくし得ない《地図は現地ではない》と，ことばの無力を強調するようになっていて，ゼミでも，そういうことが露骨にわかるような練習をかんがえてやっていたことは，1974年秋に出版された『教育を問う』（五十嵐良雄・渡辺一衛編，三一書房）に書いた。しかし，そのタネもつかいはたしてきたし，一般意味論についても一度きちんとならっておきたいし，ロープを見てもヘビだとおもわない訓練をうけられたら，こんないい

〔図2〕 シャーロット・シューシャート・リード

ことはない。

いつ——1974年8月18日（日）——8月29日(木)。どこ——合州国コネチカット州レークビル。広大なゴルフ場みたいなキャンパスのなかのホッチキス・スクール。ここは全寮制の，イギリスの伝統的なパブリックスクールのまねをした，その寮に全員とまりこみで，朝の9時から11時までのレクチャー（10時にコーヒーやすみ約10分)。11時——12時，非言語的抽象過程の実習。昼食。1時30分—3時，HNグループ。3時15分—4時45分，オーガニズミック・アウェアネス。自由時間。6時，夕食。7時15分——30分，聞き方。7時30分，レクチャー，これのおわる時間はあまりきちんとしていなかった。このあとで一般意味論に多かれ少なかれ関係のある映画。これがおわるとだいたい11時。そしてビールをのみながら自由な雑談の時間。これが日曜もやすみなくつづく。「訓練の効果はつみかさねですから，どの時間も活動もさぼらないようにしてください」

だれが，なにを。ボブ・ブーラ，理論。小肥り，八字ヒゲ，ゆかいなおじさん。すごくふざけながら話をすすめる。冗談はさっぱりわからないが，理論の要点はよく把握して整理してわからせてくれる。

シャーロット・シューシャート・リード夫人は仮りにオーガニズミック・アウェアネス担当とペーパーにはかいてあったが，なんとも言いようがない，つまりふだんはいろんなことにじゃまされて気がつかないでいるが，そういう感じに自覚的になることへの手引き。それからリスニングといって，夕方，芝生の中の大きな木のしたにすわって，いろいろな音を聞く練習。全員でとった記念写真を見ると，ほかのひとにくらべて彼女は大地からスーッとまっすぐに立って

いる。かなりの年だろうが，年を感じさせない，透明で，上品な，だれでもうけいれてくれるが，シンはつよい。ダンスの先生だけど，若いときからコージブスキーのしごとを手つだってきて，本の方の勉強もじつはものすごいひと。

ウォルター・ウィースの非言語的抽象過程に自覚的になるためのワーク・ショップというのは，美術工作の時間。なるべく，多様な材料をつかって，セミナーがおわるまでに作品を5つ作れ，と宿題をだしただけで彼はなにもしない。しかし，この実験室にはペンキ，石コウ，画用紙，銀紙，針金，接着材，いろんな材料があって，みんなハード・スケジュールの息抜き的に，自由に，いろいろなものをつくったが，じつに作者の性質が出ておもしろかった。

もうひとつ彼のHNグループ，これはHere and Now を略して，仮りにこう呼ばれている。エンカウンター・グループのようなことをして外在的な考え方，感じ方にもっていくのだそうだが，よくわからなかった。はじめは体に触れあったりすることだったが，だんだんに他人が自分のことをどうおもっているか具体的データにもとづいて手紙・日記などの形に書け，というふうになってきて，そのころになると，外国人のぼくにはよくわからない，彼らどうしのはげしいやりとりになった。

参加者のなかにはかつてノースウェスタン大学でアービング・リー教授から一般意味論をならったひとがいたが，映画ではリー教授がリンゴを片手に延々としゃべっていたり，1949年のセミナーだかで鈴木大拙のような晩年のコージブスキーがコトバコトバコトバの熱弁をふるっているのをみると，それにくらべるといまはすごくことばかずがへってノンバーバル的要素がふえたものだ。シャーロットさんなどにきいてみると，1950年代のなかばごろから，だんだんにこうなってきたのだそうだ。それからオールドタイマーにきくと，理論においても，今年ボブ・プーラやトム・ネルソンがやったように，人間の抽象過程のモデルとしてコージブスキーがかんがえたものに，さらに改良を加えようなどということは，むかしはコージブスキーの理論を理解するのがせいいっぱい

で，とてもそういうことはかんがえもおよばなかったそうだ。

一般意味論というと日本ではたいていのひとはＳ・Ｉ・ハヤカワの『思考と行動における言語』と同一視するだろうが，あれは大衆化をめざして，あまりにも国語教師向きに，コトバ中心主義であり，一般意味論のごく一部でしかない。サンフランシスコ州立大学のタカ派的総長として有名になったハヤカワと，国際一般意味論協会の不幸な関係については，よそでのべるとおもうが，コージブスキーは彼の非アリストテレス的理論をジェネラル・セマンティクスと呼んで，セマンティクスという語があるために，言語学の一分野であるような誤解があったとおもう。じつはそうではなくて一般意味論はむしろ認識論であって，その一分野にコトバがいかに認識に影響するか，ということを含んでいる哲学だ。

（一般意味論セミナー1980）マサハル

シャーロットはものしずかで，きりっとしていて，人の話をよく聞き，美しいことばを話した。彼女は 'listening' や body awareness など主に non-verbal の session を担当していた。"Stop chattering in your brain and let the sounds come into you." ということばで，ぼくたちは思い思いのかっこうでまわりの物音に耳をかたむけた。リラックスしすぎていびきをかき始める人がいると，彼女は「私たちはより目覚めるためにこの session をもっているのです。」とやさしくさとした。

セミナーが始まって３日目頃だったろうか。いつものように静かな環境の中で耳をかたむけていると，いきなり今まで聞こえなかった音がぼくのからだの中に流れ込んできた。ひとりひとりの呼吸や他の部屋にいるらしい人の気配，建物の外の話し声，鳥のさえずり，その他ブーとかシューとかいう遠くの音がぼくのすぐそばで鼓膜をふるわせていた。

その後は，他のセッションとの相互作用もあって，すこし注意を払えばたやすく自分をそういう状態におくことができたし，ものを見るときにも，いままで意識しなかった形や色のちょっとした違いにまで気がつくようになった。「美しい夕焼け」は刻々と変化するダイナミックな光のドラマとなった。

こうしてぼくはシャーロット自身の行動とセッションを通じて，必要な緊張のために適度なリラックスが必要なこと，そのバランスがうまくとれていると意識を外に向けておいて情況の小さな変化を見きわめることがたやすくなることなどを経験した。リスニングは受け身の行為ではなくて，自分がその場に積極的に参加することであった。

ボブ・プーラは，人とよく話し，よくピアノを弾いた。そして彼の lecture の半分は冗談と唄で埋められていた。何を言っているのかわからなかったが，ことば以外の部分だけでじゅうぶん腹の皮がよじれ，息がつまるほど笑った。

彼は一般意味論の主な概念を説明しながら，自分のまわりで起こりつつあることをどう評価し，どう参加していけばよいかについての枠組を明らかにしてくれた。鼻につまったような彼の発音はぼくにはとても聞きとりにくかったが，そのためにかえって個々の音やいいまわしに気をとられずに中身をつかもうとしたおかげで，ぼくの頭の中の‘一般意味論’は日毎に形を変えていった。

英語を教えているぼくは，ことばがどこから生まれ，どんなふうに働くのか，生徒が作り出す情況に自分がどう切り込んでいけるのかなどいろんな問題意識をもって参加したのだが，期間中はそんなことはすっかり忘れてしまって，ことばから入っていくボブのレクチャーと感覚から入っていくシャーロットのセッションの両極にゆさぶられながら2週目に入るころには頭のてっぺんから足の先まですっかり通りがよくなって上きげんだった。

その他，アリストテレスからアインシュタインに至る科学的認識の歴史についてのレクチャー，画家や詩人や言語学者を招いてのセッションなど盛りだくさんの1980年のセミナーは7月26日（土）から8月8日（金）までの2週間，トロントから列車で2時間ほどのオンタリオ州ロンドンの森の中に大学がある

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com